

ケータイ利用のライフスタイル研究 (3)

— 歩きスマホに対する態度(自己・他者)と特性 —

飽戸 弘¹ 鈴木 孝幸樹² ○水野 一成²

¹ 東京大学名誉教授 ² NTTドコモ モバイル社会研究所

1. 研究背景

スマートフォンの普及率が7割を超え[1]、我々の生活の中へ溶け込んだ感があるスマートフォンではあるが、歩行中や食事などの利用により、人に不快な感じを抱かせるだけではなく、事件・事故に至るなど、時々世間を騒がせる。また、アカウントの乗っ取りや個人情報の漏えいなどセキュリティに関する記事もよく目にする。ここまで普及したスマートフォンだからこそ、スマートフォンという存在が保有・未保有に関わらず、皆にとって快適な存在となるにはどのような提言を行っていけばよいのか、検討するため、2018年3月に全国調査をおこなった。本報告では、その調査結果の中でも、特に関心が高いと思われる歩きスマホについて取り上げる。

2. 調査概要

調査時期：2018年3月 調査対象：全国、15～79歳男女 調査方法：web調査

標本抽出法：QUOTA SAMPLING 性別(5歳刻み)・年齢・都道府県で割付 6,000サンプル回収

3. 調査分析手法

NTTドコモモバイル社会研究所では、2010年より毎年実施しているモバイルに関する基礎調査の中で、スマートフォンに関するマナーについてもオリジナル尺度を作成し、実査を行っている。その項目の一つに「歩きスマホ」がある。自身が歩きスマホを行っているか、また他者の歩きスマホを見て、どう感じるかを調査している。今回の調査においても、この項目を基礎とし、さらにライフスタイル(日々の移動等)や、ICT利活用状況に加え、スマホに関すること以外の一般的なマナーについても、同時に調査していた。

分析手法としては、①自己の歩きスマホと他者の歩きスマホを見てどのように感じているかの結果を元に、4つの群に分ける。②①で作成された、歩きスマホの群がどのような要因で分かれたのか、相関の強そうなものは何かを、仮説を立て調査の結果を、数量化理論第Ⅱ類を用いて分析を実施。

4. 調査結果

歩きスマホの自身がおこなっているか、また他人の歩きスマホについてどう感じるか、調査した結果は、スマートフォン所有者の内、52%が歩きスマホをおこなっていた。他人の歩きスマホを見て、気になると思った人も、66%となった。この結果をクロスさせ、4つの群に分けた(表1)。それぞれの群は、歩きスマホを行い、他人の歩きスマホは気にならない「1群：お互い様」、歩きスマホを行うが他人の歩きスマホも気になる「2群：ジレンマ」、自身は歩きスマホを行わず、他人の歩きスマホも気にならない「3群：無関心」、最後に歩きスマホを行わないが、他人の歩きスマホは気になる「4群：嫌悪感」とした。

表 1：歩きスマホへの態度を元にしたクロス集計結果 n=4, 4408

		気にならない			
行わない		3群:無関心 15% (n=653)	1群:お互い様 20% (n=867)		行う
		4群:嫌悪感 34% (n=1,504)	2群:ジレンマ 32% (n=1,398)		
		気になる			

表 2：説明変数の概要

大別	スケール	概要
ライフスタイル	交通手段	外出時の主な移動手段を5つの中から1つ選択
	リーダーとして認められたい[2]	4段階の尺度
	飽きやすい[2]	4段階の尺度
	引け目を感じる[2]	4段階の尺度
	時間的ゆとり	4段階の尺度
	居住地域の都市区分	4段階の尺度
一般的なマナー意識	一般的なマナー意識	他人の行為(16種)について、腹立たしいと感じると答えた回答数を元に3段階に分類
スマホ関連	スマホを持った時期	2017年1月に実施したモバイル社会研究所の調査結果の分布を元に尺度を作成
	スマホの利用時間	他の調査を元にオリジナル尺度を作成
属性	性	—
	年代	10歳刻み、7段階の尺度

このような群に分かれた要因は何か、表2の目的変数と歩きスマホに関する4つの群を説明変数とし、数量化理論第Ⅱ類を用いて分析をおこなった結果が表3である。相関比は高くないが、判別率的中率は、50%に近い値であった。

分析の結果の中で、3つの軸でモデル式が算出されたが、1軸モデルの式の寄与率が72.3%、2軸の寄与率が24.5%と高いため、ここでの説明はこの1軸と2軸の結果を用いておこなう。1軸のスマホへの関与クラスターの平均から、正の値が大きい順(表3のカテゴリーウェイトが右側)に「4群:嫌悪感」「3群:無関心」「2群:ジレンマ」「1群:お互い様」と並んだ。判別グラフ(表4-1)でも確認できる通り、4群と1群が正負に大きく離れているため、1軸は「嫌悪感」と「お互い様」を説明する軸と言えよう。次に2軸は正の値が大きい順に「3群:無関心」「1群:お互い様」「4群:嫌悪感」「2群:ジレンマ」となった。判別グラフ(表4-2)においても、3群と2群が左右に最も離れており、この軸は、「無関心」と「ジレンマ」を分けた理由の説明に軸と言える。

1軸の偏相関係数をみると、一般的なマナーの意識・年齢・性・スマホの利用時間が大きい。4軸嫌悪感側に反応しているのは、一般的なマナーの意識が高く、高齢、女性、スマホの利用可時間が短い人である。その反対に、1軸お互い様に倒れているのが、一般的なマナーに対し甘く、若年層、男性、スマホの利用時間が長い人である。

表3：数量化理論第Ⅱ類を用いた歩きスマホの態度カテゴリーの判別結果

アイテム名	尺度	1軸		偏相関係数	2軸		偏相関係数
		お互い様 ← ジレンマ	無関心 → 嫌悪感		ジレンマ ← 嫌悪感	お互い様 → 無関心	
1	一般的なマナー 甘 中 厳	-0.46	0.64	0.18	-0.64	0.85	0.14 ①
2	年齢 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代	-0.32 -0.39 -0.39 -0.03 0.20 0.51 1.03		0.15	-0.09 0.04 0.06 -0.23 0.07 0.22 -0.02		0.03 ⑪
3	性 男 女	-0.28	0.27	0.12	-0.19	0.19	0.05 ⑧
4	スマホの利用時間 30分未満 30-60分未満 1-2時間未満 2-3時間未満 3-4時間未満 4時間以上		0.53 0.15 -0.04 -0.15 -0.15 -0.44	0.11	-0.18 0.05 -0.17 -0.22 -0.18	0.56	0.06 ④
5	リーダーとして認められたい そう思う まあそう思う あまり思わない そう思わない	-0.09 -0.32	0.04 0.21	0.08	-0.45 -0.59	0.11 0.40	0.09 ②
6	交通手段 徒歩 電車 車 バス 自転車	-0.13 -0.20 -0.17 -0.03	0.14	0.06	-0.27 0.03 0.72 0.12		0.05 ⑦
7	スマホを持った時期 1年未満 1-3年未満 3-5年未満 5-7年未満 7年以上前 覚えていない		0.33 0.09 -0.01 -0.10 -0.13 0.00	0.05	-0.02 0.04 -0.15 -0.03 -0.08	0.72	0.05 ⑥
8	時間的ゆとり ある ある程度 あまりない ない		0.11 -0.01 -0.12 0.21	0.05	-0.32 -0.06 0.11 0.39		0.05 ⑩
9	飽きやすい そう思う まあそう思う あまり思わない そう思わない	-0.24 -0.06	0.11 0.04	0.05	-0.12 -0.03	0.55	0.05 ⑨
10	引け目を感じる そう思う まあそう思う あまり思わない そう思わない	-0.05 -0.08	0.05 0.04	0.03	-0.61 -0.26	0.18 0.38	0.07 ③
11	都市区分 政令指定 県庁 一般市 町村		0.04 -0.13 0.00 -0.05	0.02	-0.19 -0.02	0.14 0.87	0.06 ⑤

注○内数字は2軸における偏相関係数の順位（判別率中率：47.6% 相関比：1軸 0.17 2軸 0.06）

次に2軸の偏相関係数をみると、一般的なマナーの意識が高く、リーダーとして認められたいもやや高い。一般的なマナーに甘く、活動性が低い人が、2軸ジレンマに倒れている。その一方、一般的なマナーに厳しく、活動性が高い人が無関心に傾いた。

表 4-1：数量化理論第Ⅱ類を用いた歩きスマホへの態度カテゴリーの判別グラフ 1 軸

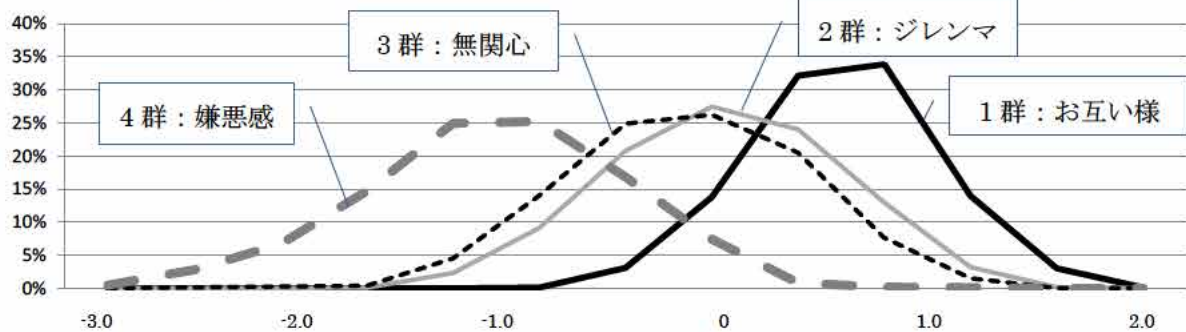
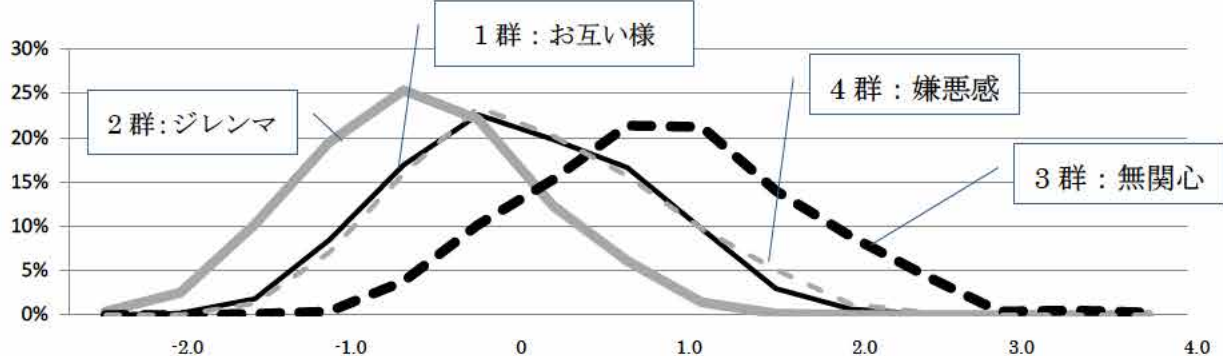


表 4-2：数量化理論第Ⅱ類を用いた歩きスマホへの態度カテゴリーの判別グラフ 2 軸



5. 考察

今回の分析結果より、歩きスマホを行い、他人の歩きスマホを見ても気にならない層は、一般的なマナーが作用していることが示唆された。また年齢による違いも大きく、高齢層は歩きスマホに対し、厳しい見方をしている。

歩行中にスマホを利用することは通常歩行と比較し、歩行速度、歩幅が有意に減少する[3]。それにより周りが不快な思いをすることもある。さらに歩きスマホによる交通トラブル、周りに与える影響が社会問題化している昨今、どのように啓発活動をおこなっていけば、少しでも減らせることができるか、今までの先行研究においても、危険性を訴えるだけではなく、「スマホは便利だが、歩きスマホではその便利さは得られない」[4]など、具体的な研究もおこなわれている。今回の研究結果を基礎とし、群別にどのような対策がより有効であるか検討していきたい。

6. 参考文献

- [1] モバイル社会研究所(2018 発刊予定)「(仮称) データで読み解くスマホ・ケータイ利用トレンド 2018-2019」中央経済社
- [2] 柳井晴夫、柏木繁男、国生理枝子(1987)「プロマックス回転法による新性格検査の作成について (I)」『The Japanese Journal of Psychology 1987, Vol158, No. 3』, 158-165
- [3] 中村葵ら(2016)「歩きスマホが歩行に及ぼす影響について」『Japanese Journal of Health Promotion and Physical Therapy Vol. 6, No. 1』, 35-39
- [4] 村越暁子、岡田安功、宮地由芽子、宇都原泰洋(2015)「歩きスマホの抑制に関する検討」『信頼性シンポジウム発表報文集 2015_秋季(28)』, 73-76